

告別式は参列者にとっても私にとっても都合の良い死後 3 日後の日曜に葬儀社のホール（雄踏）で行えることになった。事前の心づもりとしては、近くの雄踏斎場（火葬場）を考えていたが、葬儀社の勧めに従った。

僧侶は葬儀社に紹介して貰った。三日目（初七日）法要も含めて、お布施は 7 万 5 千円と決まっていたが悩まなくてもいい。当初は、新家であったので菩提寺はなかったが、近所で縁あるお寺があったので、頼んでみたが、日曜は法事があるため都合がつかなかった。

しかし縁とは不思議なもので、掛川から来てくれた僧侶には縁があった。通常は告別式も三日目も一人の僧侶が読経してくれるのだが、都合により告別式は現任職が、三日目は前住職が読経してくれた。その前住職と火葬の間に話をしていると、その方が私の幼馴染の母親の異母弟であることが分かった。昔「山寺」と呼ばれた半田山の龍泉寺（前住職の実家）に、私は幼馴染と共に行って、近くに湿地で食虫植物を採った。

前住職・井上貫道老師は参禅会の指導で全国に行っていて忙しく、まだ 70 歳過ぎだが住職を引退されたようだ。私が般若心経を唱えられるのは、東京に居た頃、鍼灸・漢方の師が筑波山麓で毎月開いていた接心（参禅会）に参加して、お経を唱えていたからだ。だから私の鍼灸師仲間には座禅する人がいて、老師の参禅会にも参加している様子である。老師はとてもしやすく、気さくな方だった。

70 名用のホールはほぼ埋まり、告別式が行われた。火葬後の三日目法要には 32 名が参列した。法要後、全員で記念写真を撮った。

精進落としは、別室で会食とした。こういう時にしか会えない親戚の親交の場とした

かったので、持ち帰りとはしなかった。ただこれまで、親戚の葬儀に参列してきて、亡くなった方の思い出が語れることなく、世間話になってしまうのは違和感があった。そこで私が仕切れるこの場では、亡くなった父に関する思い出を語ってもらった。

3 月 7 日が四十九日に当たり、一般的にはその前の日曜に法要が行われるが、確定申告を済まさないとはならず、落ち着かないので、家族のみで四十九日法要を行い、19 日日曜に姉たち（子・孫・ひ孫）に来てもらい、総勢 22 名で納骨法要を行うことにした。

四十九日は祭壇を無人販売などで買ったたくさんのお花で飾り、家にあるデコポンと、父のお気に入りのイチゴ園から買った 20 個 2400 円のりっぱなイチゴを盛りつけた。父が作った干支の動物やフクロウ、カエルも飾った。そして本位牌と仮位牌を立てた。家にあったよく乾燥した太い竹筒を木魚の代わりとし、私が般若心経他いくつかを読経し、皆で焼香した。最後に父からの贈り物として、皆でイチゴを頂いた。

19 日も同様に大人数で法要を行い、お墓に行き納骨し、その後、会食となった。

「当然 90 を越えると思っていた父が急死してしまいました。でも、皆とは新年会で良いお別れができていたのだと思います。2・3 年すれば、母の手に負えない状態になっただろうし、父の暴言を受けている母が先に先に逝ってしまったかもしれません。結局、父は私たちに大した苦勞を掛けずに逝きました。老いの苦を受け入れ、その中で生きようとする意志を持たず、死にたいと思っても死ねなかった父にとって幸いだったのだと思います。母も生き延びました。」

（2017 年 3 月春分）

【雑想】急死から納骨まで（下）

齊観堂 鈴木齊観